

※同録送り先: 〒611-0011 京都府宇治市五ヶ庄
京都大学・防災研究所 准教授 竹門康弘 様
「笑福亭晃瓶のほっかほかラジオ」月～金6:30～9:59
「ほっかほか・今朝の聞くサブリ」月～金7:15～約13分間
7月5日(月)～7月9日(金)
シリーズ: 今週のトピックス

2021年7月5日(月)
「深泥池の環境保全」に関心を
ゲスト:「深泥池水生生物研究会」の世話人で、
京都大学・防災研究所の
准教授 竹門 康弘(たけもん・やすひろ)さん

薫 さて、「ほっかほか・今朝の聞くサブリ」。

今日は「『深泥池(みどろがいけ)の環境保全』に関心を」という話題です。

晃瓶 国指定の天然記念物にもなっている『深泥池』では、ここ数年、ジュンサイや外来植物が過剰に繁殖し、生態系への影響が懸念されているそうです。

そこで、毎年、「環境保全に向けて」、研究会や、NPO団体や、市民の参加も募り、『深泥池』で過剰に繁殖している水生植物の清掃活動が行われています。

そして、より多くの人たちにも『深泥池』に関心を持ってもらいたいと活動も行っています。

『深泥池』の環境の変化についてや、今は、どういった状況なのかについてのお話をお聞きし、そういった状況の変化について、研究会ではどのような活動を続けているのかについて、お話をお聞きましょう。

その活動について、お話をお聞きましょう。

そこで、お話を伺うのは、

「深泥池(みどろがいけ)水生生物研究会」の世話人で、
京都大学・防災研究所 准教授の
竹門 康弘(たけもん・やすひろ)さんです。

TEL先: (186)0774—38—4253(職場)
万がーの時: (186)090—8883—5980(携帯)

晃瓶 おはようございます。よろしくお願いします。

Q1 まず、あらためまして『深泥池(みどろがいけ)』は、どのような池なのでしょう？

京都市北区の市街地にある9ha、周囲1.5kmの小さな池ですが、深泥池には京都府内の絶滅危惧種の動物が50種以上生息しており、生物群集全体が国の天然記念物に指定されています。その種多様性は驚異的です。たとえばトンボ類だけで68種記録があり、そのうち60種は現在も観察することができます。

深泥池の中央にはミズゴケでできた浮島があり、珍しい動植物がたくさん棲んでいます。

深泥池の名のとおり、18mもの深さまで泥炭と呼ばれるミズゴケなどの植物遺体が堆積しています

Q2 その『深泥池』ですが、現状は、どのようなことになっているのでしょうか？

1960年代までは、池や集水域の植生を刈り取って利用していましたが、人が利用しなくなると、池の中に有機物が堆積する速度が早まって、富栄養化が進んでいます。また、池に外来動植物を放す人がいるため、食物連鎖のバランスが崩れて、特定の種ばかりが増える状況になっています。

Q3 ジュンサイや外来植物が過剰に繁殖するのは、どうしてなのでしょう？

深泥池では、1990年代にジュンサイが絶滅に瀕するほど減ってしまいました。ジュンサイはもともと貧栄養で酸性の水質を好みます。ところが、2002年までは松崎浄水場の配水池から琵琶湖の窒素やリンなどの養分を含んだ水が深泥池に流れ込み、深泥池の水質が富栄養で中性の水質になっていたため、ジュンサイが生えることができなかったのです。この関係が分かり、2003年から京都市水道局がこの水道水の漏水をポンプアップして池に入らないようにしてから、池の水質が改善されて、2年後の2005年にはジュンサイが池全体に広がりました。

Q4 本来の『深泥池』の姿を維持するには、どういったことが必要なのでしょう？

深泥池が健全であるためには、池の水質を酸性で貧栄養に保つ必要があります。そのためには、窒素やリンを多く含む生活排水や水道水などを入れないことが重要です。

過去の流入によって過剰に繁茂してしまった植生については、人為的に刈り取ることで有機物を減らす必要があります。

Q5 そこで、「深泥池水生生物研究会」などが、『深泥池の環境保全』活動を行っているというわけですね。

研究会の設立は、いつ、どのようないきさつだったのでしょうか？

今から23年前の1998年に深泥池水生動物研究会として発足しました。最初の設立目的は、オオクチバスやブルーギルなどの外来魚を駆除することで、深泥池の生物群集を保全することにあります。ただし、深泥池は泥が深い上に浮島や水生植物も茂っていますから、溜池のように水を抜いて外来魚だけを駆除したりできません。このため、定置網、モンドリ、投網、産卵床破壊などの方法で時間をかけて外来魚の個体数を減らす努力を続けています。

その結果、外来魚を少ない状態に維持していますが、外来魚の影響で減ってしまった動物が果たしていた食物連鎖の働きはなかなか回復しません

Q6 これまで、具体的には、どのような取り組みを行ってきたのでしょうか？

外来魚の駆除や過剰に繁茂した外来植物やジュンサイの除去などを行っています。また、その効果を明らかにするために、毎年同じ方法で、魚類の生息状況、水生昆虫やエビなどの底生動物の生息状況、そして水質変化について継続的にモニタリング調査しています。

その結果、ここ数年の間に、フナ の個体数が増えてきました。また、水質は酸性で貧栄養の好ましい条件の場所が増えています。

Q7 ちなみに、今年も、もうすでに、過剰繁殖した、ジュンサイや外来植物の刈り取りを行ったそう

ですが、どのような様子だったのでしょうか？

2014年から池の水面を覆うジュンサイとオオバナノイトタヌキモの実験的な刈り取り作業を始め、2019年と2020年は20m×50mの範囲を、2021年にはさらに面積を増やして40m×50mの範囲の間引きを目指しました。

今年は5月22日から6月27日まで間に計10日間の刈り取りを行い、ジュンサイとオオバナノイトタヌキモを合わせて約2.5tを除去しました。しかし、それでも40m×50mの全域には及びませんでした。

Q8 こういった取り組みは、『深泥池』のどのような環境の保全につながるのでしょうか？

ジュンサイやオオバナノイトタヌキモが水面を覆ってしまうと、光が水中に入らず暗くなるため、沈水植物が生活できない問題や、水面から酸素が溶けにくくなるため、水中が酸素不足となり魚や底生動物が住みにくなります。

ジュンサイとオオバナノイトタヌキモの刈り取りによって水中の光環境や酸素環境を改善することにつながります。今年の水質調査の結果、繁茂している場所で7%まで低下した溶存酸素濃度が刈り取った場所では33%まで回復することがわかりました。

Q9 実際に取り組みに参加すること以外に、こういった形で、関わることで、『深泥池の環境保全』につながるのでしょうか？

まず、深泥池の景観の美しさや生き物の豊かさを見に来ていただくのが良いと思います。その素晴らしさを知ること、保全の必要性を共感していただけることでしょう。深泥池では、どなたでも参加できる自然観察会や市民参加型の水質調査なども行っておりますので、共感の次は参加の道が開けています。

将来的には、池で刈り取られた植物を肥料にする試みや雨に含まれる窒素が森林で吸収されやすいように集水域を里山管理することが望まれます。その際に、実際に作業に参加しない方も、里山の産物を日常生活のなかで利用するライフスタイルを心がけていただければ間接的に『深泥池の環境保全』につながると思います。

Q10 お問い合わせ先を教えてください。

「深泥池水生生物研究会」の公式サイトがありますので、そちらからメールをお願いします。キーワードは深泥池水生生物研究会です。

【中村】今朝は、

「深泥池(みどろがいけ)水生生物研究会」の世話人で、
京都大学・防災研究所 准教授の
竹門 康弘(たけもん・やすひろ)さんにお聞きしました。
以上、「ほっかほか・今朝の聞くサブリ」のコーナーでした。